



企画展 生物多様性の過去・現在・未来 ～おおさかで今私たちにできること～

● 1992年の地球サミットで生物多様性条約が採択されて以降、生物多様性の保全や自然資源の持続可能な利用の重要性はますます高まっています。近年国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）についても、生物多様性はそのすべての目標に貢献するものと指摘されています。

● 一方で、近年の著しい経済成長やグローバル化の中で、私たちの暮らしや自然との関りかたも大きく移り変わってきました。その結果、私たちは今、様々な外来生物の侵入、山地災害の増加、里山の荒廃にともなう獣害の増加など、生物多様性の低下に起因する多くの問題に直面しています。

● この先、生物多様性の恵みを末永く享受し、持続的で豊かな日々を送っていくためには、私たち一人一人が今何が起きているのかを知り、つながりあい、身近なことから行動していくことが必要です。

● 本企画展ではこのような背景のもと、生物多様性をめぐる世界的潮流、私たちの暮らしの変化、今生きている問題等を分かりやすく解説したパネルや、これから大阪を脅かす新たな特定外来生物の生体を展示します。さらに、私たちがつながりあい行動していくために、当センターで実施している取り組みについてご紹介します。



生物多様性をめぐる 世界と日本の制度の変化

- 生物多様性に対する取り組みは1990年代から本格化しました。
- 世界的な取り組みとしては、まず生物多様性条約が採択され、生物多様性の保全が目的として掲げられました。
- 日本も生物多様性条約を締結し、生物多様性国家戦略を策定して取り組みを強化しました。
- その後、生物多様性の保全と持続可能な利用が重要度を増す中で、様々な目標や協定が採択されています。

生物多様性に関する世界と日本の動き



世界の動き	国内の動き
<p>1992 ブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議で生物多様性条約が採択</p>	<p>1993 日本も生物多様性条約を締結</p>
<p>2010 愛知県名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締約国際会議(COP10)で、「愛知目標」が採択</p>	<p>1995 初の生物多様性国家戦略を策定</p>
	<p>2002 新・生物多様性国家戦略を策定</p>
<p>2015 国連サミットで「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、17の持続可能な開発目標(SDGs)が提示</p>	<p>2007 第三次生物多様性国家戦略を策定</p>
<p>2015 フランス・パリで開催された国連気候変動枠組条約第21回締結国会議(COP21)で「パリ協定」が採択</p>	<p>2008 生物多様性基本法が制定</p>
	<p>2010 生物多様性国家戦略2010を策定</p>
	<p>2012 生物多様性国家戦略2012-2020を策定</p>
	<p>2014 大阪府レッドリスト2014を作成（大阪府）</p>
	



エスディーゼーズ

せいぶつたようせい

SDGsと生物多様性

- **エスディーゼーズ** **SDGs**とは、**じぞくかのう** **かいほつもくひょう** **サスティナブル** **デベロップメント** **ゴールズ** (Sustainable Development Goals) のことです。
- **だれ** **ゆた** **あんぜん** **く** **しょうらい** **わた** **けいぞくてき** **いとな** **もくてき** **さだ** **こくさいしゃかい** **きょうつう** **もくひょう** **を目的に定められた、国際社会共通の目標です。**
- **せいぶつたようせい** **すべ** **もくひょう** **みっせつ** **かか** **じゅうよう** **ようそ** **生物多様性は、全ての目標と密接に関わる重要な要素です。**

エスディーゼーズ **SDGs**における17の目標

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



エスディーゼーズ **SDGs**と生物多様性の関係

- **せいぶつ** **ちよくせつ** **かんけい** **うみ** **ゆた** **まも** **りく** **ゆた** **まも** **い** **生物と直接関係する「14. 海の豊かさを守ろう」、「15. 陸の豊かさも守ろう」以外の目標にも、生物多様性は非常に重要な働きをしています。**
- **たと** **せいぶつたようせい** **めく** **しよくりよう** **みず** **きが** **あんぜん** **みず** **せかいじゅう** **うみ** **しんりん** **にさんかたんそ** **きゅうしゅう** **きのう** **きこうへん** **どう** **ちよくせつてき** **たいさく** **かか** **わたし** **く** **きそ** **せいぶつたようせい** **生物多様性の恵みとしての食料や水は「2. 飢餓をゼロに」や「6. 安全な水とトイレを世界中に」に、海や森林の二酸化炭素を吸収する機能は「13. 気候変動に具体的な対策を」に関わっています。私たちの暮らしの基礎をなす生物多様性の保全是、持続可能な社会の実現のために必要不可欠です。**



生物多様性センターの変遷から見る

私たちの暮らしの変化

- 私たちの暮らしは、戦後、人口が急増し食料増産が必要だった時代から、高度経済成長を経て大きく変化し、その中で自然との関わり方も移り変わってきました。
- 時代の要請に合わせて様々な課題解決に取り組んできた当センターの歴史からも、その変化がうかがえます。

社会の変化にともなう当センターの役割の変遷



1955年(昭和30年) 寝屋川養魚場

- ～戦後10年、まだ日本が貧しい時代～
- ため池での食用魚の生産拡大や産業振興
 - コイやフナの養殖用稚魚の生産や販路拡大



1967年(昭和42年) 淡水魚試験場

- ～経済成長と公害、失われゆく自然環境～
- 釣り用カワチブナの育種試験や魚病対策
 - 水生生物を利用したため池水質改善試験
 - 水辺環境についての普及活動



2002年(平成14年) 水生生物センター

- ～環境保全の気運高まる、外来種問題の顕在化～
- イタセンパラの人工繁殖技術開発や野生復帰
 - 外来種の防除技術の開発
 - 生物多様性に関する普及啓発事業



2018年(平成30年) 生物多様性センター

- ～人と自然環境の持続可能な発展をめざす時代～
- 水辺に加え、森林や野生動物などに関する研究
 - 自然環境と人が関わる獣害などの研究



せいぶつたようせい

めぐ

生物多様性の恵み

- 私たちの暮らしは食料や水の供給、気候の安定など、生物多様性が生み出す様々な恵みによって支えられています。
- この恵みを「生態系サービス」と呼び、大きく4つに分けることができます。
- 将来にわたって生態系サービスを受け続けていくためには、基盤となる生物多様性を保全していく必要があります。

供給サービス

- 食料や水、衣服や医薬品の原料など、私たちの暮らしに様々な生物資源を供給するサービスです。



いやくひん かいはつ
医薬品の開発



まいにち しょくじ
毎日の食事

調整サービス

- 気温・気候の調整や自然災害の緩和および事後の回復など、私たちが安定的に暮らせるよう調整するサービスです。



ちきゅうおんだんか
地球温暖化



しぜんさいがい
自然災害

基盤（生息・生育地）サービス

- 養分、土壌、水など、全ての生物に対して様々な生息・生育地を提供するサービスです。



さとやまりん
里山林



しっち
湿地

文化的サービス

- 芸術などの文化のインスピレーションを与えたり、教育や観光の場を供給するサービスです。



げいじゆつ
芸術活動



きょういく ば
教育の場



生物多様性を脅かす4つの危機

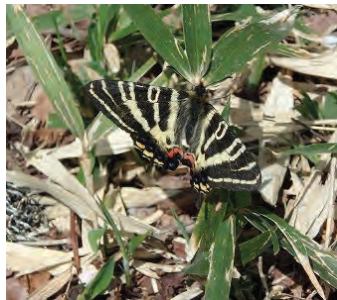
- 私たちの暮らしを支える生物多様性は、現在、様々な危機にさらされています。
- 生物多様性を脅かす危機は、大きく以下の4つに区分されます。
- これらはどれも、人間の活動が大きな要因になっています。
- 当センターでは、生物多様性を脅かす危機の解決に向けて、様々な調査研究を進めています。

第1の危機

- 大規模な開発による生息環境の破壊や、乱獲による個体数の減少など、人間による過剰な利用が原因となる危機です。



大規模な開発



ギフチョウ

第2の危機

- 人間と自然の関わり合いが縮小したことによる危機です。里地里山など人の手で維持されてきた環境の変化や、野生動物の増加による影響が懸念されています。



里山林



増加するニホンジカ

第3の危機

- 外来種など、人間によって生態系に持ち込まれたものによる危機です。



アライグマ



オオクチバス



ブルーギル

第4の危機

- 気候変動など、広域的な地球環境の変化による危機です。逃げ場のない山頂付近の植物の減少や、熱帯域の毒をもつ生物の分布拡大などが懸念されています。



和泉葛城山のブナ林



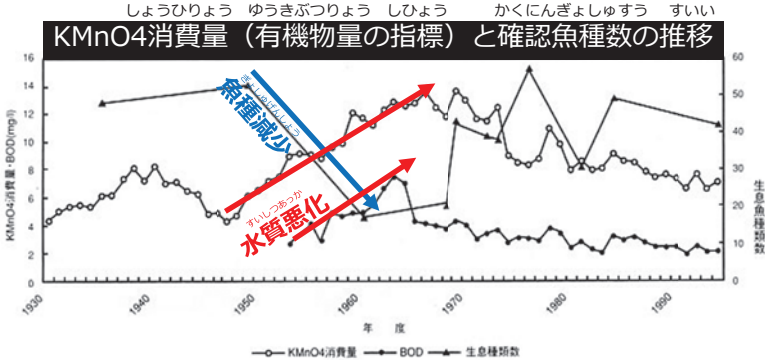
ヒョウモンダコ



- 都市を流れる淀川は、人間活動の影響を大きく受けてきました。
- 淀川にすむ天然記念物のイタセンパラも、その影響を受けて2006年には野生絶滅に近い状態となりました。
- 当センターでは生息環境の改善や野生復帰の取り組み、新たな外来種の定着状況の把握などの活動を続けています。

水質悪化による生息魚類の減少

● 1960年～1970年代ごろ



- 工場や家庭からの排水により、淀川の水はとても汚れ、魚種数が減少。イタセンパラも一度姿を消したが再発見される。
- 1974年、天然記念物に指定。

外来種の生息数急増

● 2000年前後

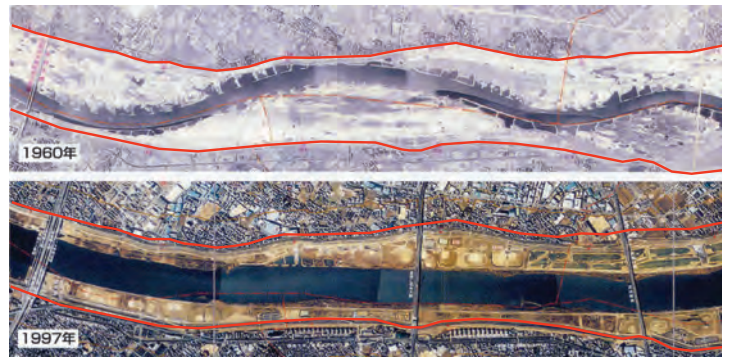
城北ワンドの2006年魚類調査



- 外来魚が急増し、在来魚が減少。イタセンパラの確認もわずかになる。
- 1995年 国内希少野生動植物種に指定。

生息域の環境変化や消失

● 1970年～1980年代ごろ



- 河川改修や公園設置のための埋め立てなどで、生息環境であるワンドが減少。
- 1984年、水道などの取水のため淀川大堰が稼働し、ダム湖のようになる。

野生復帰の取り組み



- 2009年から野生復帰のために外来種防除や生息地の環境改善を開始
- 2011年にイタセンネット設立、2013年に城北ワンドへ500個体を野生復帰。
- 2020年現在まで、毎年繁殖を確認。



里山の荒廃と

私たちの暮らしへの悪影響

- 里山とは、人里に近く、人がさまざまな形で利用し続けてきた森林のこと。
- 人が利用することで特有の環境が維持され、多くの生物多様性の恵みを与えてくれる貴重な場所となってきました。
- しかし、近年の急速な産業構造の変化や高齢化により、今では多くの里山が管理放棄され、様々な問題が生じています。
- これからの里山のあり方を考え、行動していく必要があります。

人が形作ってきた里山という環境

- 私たちは里山を、薪や炭、山菜などの食料や木材、肥料や薬などをとるために、昔から繰り返し利用し続けてきました。
- その結果、里山には若い木々からなる明るい森や草地などの環境が形成され、様々な生物が育まれてきました。



北摂地域にみられる里山景観



すみや炭を焼く炭窯



アケビの実



アカハライモリ



ミヤマクワガタ



シイタケのほだ木



カタクリ



ササユリ

里山の荒廃に起因する諸問題

- 里山が荒廃したことで、里山を棲みかとしていた貴重な生物たちが減少しています。
- 里山の生物多様性が低下したことで、私たちの生活に影響する問題が増えています。



獣害の増加



放棄竹林の拡大



ナラ枯れによる森林衰退



土砂災害の増加